



◆コーチとは、選手の心に響く指導をする仕事

「野球とサッカーでは、世間的にはどちらに人気があると感じていますか？」  
と質問されたら、あなたは、どのように答えますか？

リサーチパネル社の調べによりますと（14万2930人が対象）

- ・野球：45.7%
- ・サッカー：36.9%
- ・わからない：17.4%

という結果になっているようです。

私は、サッカーの人気の方が野球を上回っていると感じていたので、この調査結果は意外でした。

ところで、今回ご紹介する仕事楽しい人は、少年サッカーのコーチを務めている、**海老根宏**さんです。

海老根さんは、小学校1年生からサッカーを始め、大学を卒業するまでサッカーに打ち込んできました。

海老根さんのお兄さんは野球をしていたので、物心がついた時から野球をする機会があったのですが、守備のポジションが固定されていたり、球を打つのに打順を待たなければならぬ野球よりも、常に動きのあるサッカーの方が面白いなど、幼いながらも感じてサッカーを選んだそうです。

海老根さんは、中学・高校時代ともに、クラブチームの大会で、日本一にもなりました。

このように、幼少から大好きなサッカーに打ち込んできたため、大学卒業後は、できれ

ば、サッカーのコーチの仕事に就きたいと志望しましたが、コーチの仕事だけで生計を立てるのは難しく、この道を半ば諦め、一般企業へ就職するつもりでした。

そんな時に、大学のサッカー部の監督から、現在所属するクラブチームの代表者を紹介され、「ちょうど今、コーチを一人探していたんだ」との話になり、幸運にも、サッカーのコーチの仕事が転がり込んできました。

海老根さん曰く“ピンポイントの出会い”だったそうです。

それは、クラブチームが募集する社員としてのコーチの枠は極めて少なく、しかも、卒業が間近に迫ったタイミングだったので、まさにピンポイント（＝奇跡）と、海老根さんは表現したのです。

海老根さんがコーチとして子どもに接する際に大切にしている考え方の原点は、高校時代に出場した全国大会で自分のせいで負けてしまった時に、監督からしていただいたことにあります。

海老根さんはこの出来事を、次のように説明してくれました。

「なんてことをしてしまったのかとしょげかえる私に、監督は、「この試合は、確かに前回のミスで負けてしまったけれど、これまで、お前に助けられて勝ってきたのだから、今日のことは忘れて、先のことを考えろ」と、声をかけてくれたのです。しかも、風呂場の中で。恐らく、私が一人で風呂に入るのを監督は見計らってくれていたのだと思います。監督は、私以上に悔しくて、「お前、何やってんだ！」と、本当は、怒鳴りつけたかったはずなんですけどね」

「この監督の一言が、数十年たった今でも私の心に残り、支えになっています。だから、私は、“**選手の心に響く指導**”ができるコーチになりたいと思っています。私と同じように、長い年月が過ぎても、「あの時、コーチからこんなことを言われたよな」と思い出し、前に向かって歩いてくれる。このように、多少なりとも係わった子どもたちにプラスの影響を与えられるのが、指導者の目指すことだと思うのです」

さて、この監督からの教えを原点にし、海老根さんがどのようなコーチを務めているのかを、“勝つこと的前提に、身につけるべき基礎力とは”で、ご案内します。

#### ◆海老根さんが大切にしているキーワード

##### 「自分で気づき、感じる」

自分が、今やるべきことが何かを気づき、感じられる子どもを増やしたい。サッカーの試合以外の場でも、アタフタとしている人をみかけたら、「どうしましたか」と声をかけられる、そんな人になってもらいたい。

#### ◆海老根さんのパワー〇〇

練習場や試合場に到着し、ウェアや時計、そしてホイッスルを身につけた時に、コーチとしてのスイッチが入る。

ちなみに、選手時代は、スパイクを履いた時にスイッチが入った。

◆海老根さんのコツコツ

体調管理の一環として、毎日、体重計に乗る。

体重は中学3年生の時から、ほぼ変わりなくキープできている。

◆勝つこと的前提に、身につけるべき基礎力とは

海老根さんがコーチとして意識していることは、“心に響く”指導に加えて、自分で状況判断し、実行する力の養成です。

試合中に、

「クリアしろ！」

「パスを出せ！」

「シュートを打て！」

と、繰り返し選手に声をかければ、選手は当然、コーチの言われた通りに動くことしか考えなくなります。人からの指示を待つのではなく、自ら状況を把握して動けるようにしなければ、本当の意味での人材の育成にならないと、海老根さんは言います。

この話を聞いて私は、自分の子どもも含めて、現代の子育ては、「ああしろ、こうしろ」と親が子どもに細かく口を出し、余りにも過保護になりすぎている実情が目に浮かびました。

海老根さんは、

「子ども達に試合に勝つ喜びを味わってもらうのは、自分の喜びでもあるので、当然、勝負には拘っています。でも、それが、子どもたちの真の実力ではなく、コーチからの指示をロボットのように忠実に守った結果なら何の意味もない。サッカーを教えた子どもが、自分のクラブチームを離れて他のチームでプレイした時に、仲間から「お前は、強豪チームにいたのに、指示がないと動けないんだ」と言われたら、どんなに傷つくだろうか。だから、勝つこと的前提として、自ら状況を把握して、自分が最適だと考える行動を取れる。これが、スポーツを通じて人材育成する目的だと思うのです」と、力を込めて説明してくれました。

自ら状況を把握するとは、視野を広げること。

このために、海老根さんは、ボールを追いかけるのに夢中になっている子どもたちに、

「逆サイド！」とか、

「後ろ！」というように、死角になっているエリアに目を向けるように声をかけるのだそうです。

- ・見えれば、そこから判断が生まれる。
- ・見てどうするかは、自分で決める。

海老根さんの指導方針は、ここに集約しています。

ただし、海老根さんは、これだけでは足りないと言っていました。

それは、自分の考えを人に伝える力。

自分で気づいたことを自分だけでやっていると、チームの力は高まらないからです。

伝える力を養うために海老根さんは、今年の夏合宿から1分間スピーチを導入したそうです。

スピーチの内容は、

「練習の目的をこのように捉えて、こんな工夫をした」とか、

「整理整頓が大切なので、合宿所のスリッパを綺麗に並べた」とか、

ジャンルを問わず、何でもOKにしたそうです。

合宿に参加した子どもたちは、「1分なら簡単に話せるよ」と自信满满だったようですが、やってみると20秒とか30秒しか話せない。この体験から、伝えることの難しさを受け止めて、スピーチの練習に励みました。

視野を広げて判断し、自ら行動することに加えて、他者にも伝えて協調を促す。

海老根さんが拘るこの基礎力は、サッカーだけではなく、社会人として生活する上で、大いに役立つものです。

インタビューの開始から終わりまで、穏やかな話しぶりでしたが、海老根さんの一言一言が、「子どもの自立の芽を摘まないでくださいね」と我々大人たちに語りかけているようで、心に突き刺さりました。

#### ◆海老根さんのプロフィール

職業：サッカーコーチ

所属：FCトリプレッタ (<http://footballnavi.jp/fctrp/>)

#### ◆サッカーコーチとは？

(13歳からのハローワーク公式サイトに掲載されている村上龍氏の解説の中から、監督・コーチ業を抜粋しました)

競技によって異なるが、プロの選手を育てたり、プロの選手やチームを指導する監督やコーチは、やはりその競技の経験者、それもプロやそれと同等のキャリアがある元選手が圧倒的に多い。もちろん現役時代の経験の蓄積があるからだが、人脈がものをいう点も見逃せない。もうひとつ、職業として監督、コーチが成立しているのは学校だ。本職は教師でも、その学校のスポーツへの力の入れ方によっては、こちらのほうが主となる。学校によっては専門のコーチを学外から招くこともある。この場合は指導実績が求められる。サッカーのように、アマチュアからプロまで段階的にコーチの資格制度を設けたり、テニスのように、コーチのプロを資格として設けている種目もある。

#### ◆サッカーコーチに求められる能力

気づかせる力：子どもの視野を広げさせる能力

待つ力：子ども自らが答えを導き出す前に口を出さない能力

信じる力：全ての子どもたちが、サッカーを通じて自立力を養えるという信念

向学心：子どもの才能を導き出す手法の探求

感謝心：家族を含めて多くの方々の支援のお陰で仕事ができるという感謝の気持ち